

## アオジソにおけるチャノホコリダニの発生について

小野元治・北内義弘・野上隆史(大分県農業技術センター)

Motoharu ONO, Yoshihiro KITAUCHI and Takashi NOGAMI:  
Infestation of *Polyphagotarsonemus latus* on Perilla

大分市を主産地としたシソ(アオジソ)で、ここ数年葉縁や新芽に原因不明の褐変、萎縮症状が発生している。被害葉にはチャノホコリダニの寄生が認められたので、健全株に本虫を接種し、被害症状の再現が可能であることを確認した。本種によるシソの被害についての報告は見当たらず、本邦では初確認であるのでその概要を報告する。

## 1. 試験方法及び結果

## 1) 被害実態調査

1989年8月8日に大分県農業技術センター野菜部圃場のアオジソ及び、1990年9月5日に大分市滝尾の6圃場85aについて被害の実態を調査した。野菜部圃場では、被害株率100%であり収穫皆無の状況であった。試験圃場内で栽培されている2品種、大高と大分系統は被害状況が異なり、草丈が各々68.2cm、46.7cmとその差が21.5cmあり、品種の選好性が認められた。大分市滝尾では、6圃場中5圃場65aで発生が認められ、アオジソの生育が進むにつれ、被害が増加する傾向があった。両地区ともに被害株の新芽及び展開第1葉に本虫が多数認められた。

## 2) 種の同定

走査型電子顕微鏡を用いて形態の観察を行った。植物寄生性ダニ類の科などへの検索表<sup>1)</sup>により、本虫は体が柔らかく4対の脚をもち、雌の第4脚の末端には歩行器がなく、2本のむち状の毛だけで終わることからホコリダニ科とした。さらに、雄の第2、3脚の末端は爪間体のみが存在し、第4脚の末端付近にはけずめ状の突起があり、その基部には太い毛を生じること。雌雄成虫や卵の体長、顎体部の栗実状形態、卵の表面には気泡状の小突

起が多数ある等の形態的特徴がチャノホコリダニと一致したので、このダニをチャノホコリダニと同定した。

## 3) 被害の再現

1990年4月20日、雨よけハウス内でアオジソ(品種:大分系統)を5,000分の1aポットに播種し、本葉12葉となった6月6日に成虫2ペアを接種し、以後の接種、無接種各区10ポットにおける寄生虫数の増殖状況及び被害状況を調査した。8月7日の調査では、接種区の展開第1葉17.7cm<sup>2</sup>上に卵63個、成幼虫30頭が認められ、萎縮症状を示した被害葉率が36%に達したのに対し、無接種区では卵が9個、成幼虫8頭と少なかったため、被害率も9%と低かった。この結果から、アオジソの被害症状はチャノホコリダニの加害によるものと考えられた。

## 4) 防除試験

1989年12月12日に草丈50cmの被害株を譲り受け、5,000分1aポット当たり1株移植し3回復とした。12月19日、展着剤リノ-5,000倍を加えた第1表に示す薬剤を肩掛式手動噴霧機で葉裏が十分湿る程度に散布した後、ガラス室内で管理した。調査は散布前、散布から3日、8日及び16日後に行い、上位葉15mm四方上の寄生虫数を実体顕微鏡で計数した。その結果、低密度時の試験であったが、プロフェジン水和剤、フェンプロパトリン乳剤、ポリナクテン複合体・BPMC乳剤の各1,000倍及びキノキサリン系水和剤、フェニプロモレート乳剤の各1,500倍が有効であった。

以上これまで得られた調査結果についてまとめたが、アオジソにおけるチャノホコリダニの発生生態、要防除水準、防除方法等明らかにされていない点が非常に多いので今後検討を加えたい。

第1表 シソのチャノホコリダニに対する防除効果(1989)

供試薬剤	濃度 (倍)	寄生虫数			
		散布前 12/19	3日後 12/22	8日後 12/27	16日後 1/3
キノキサリン系水和剤	1,500	14.6	3.6	0	1.6
ポリナクテン複合体BPMC乳剤	1,000	13.0	0	0	0.6
フェニプロモレート乳剤	1,500	8.7	0	0	1.0
プロフェジン水和剤	1,000	21.3	7.7	0.3	2.0
フェンプロパトリン乳剤	1,000	21.3	3.7	2.0	1.9
ヘキシチアゾクス水和剤	2,000	15.0	5.7	4.0	2.7
フルフェノクスロン乳剤10	2,000	7.0	3.6	6.3	1.0
無処理		11.7	4.6	8.7	6.3

注) 寄生虫数は成虫、幼虫、静止虫合計値、3区平均

## 引用文献

1) 江原昭三: 農業ダニ学 55, 全国農村教育協会, 1975.

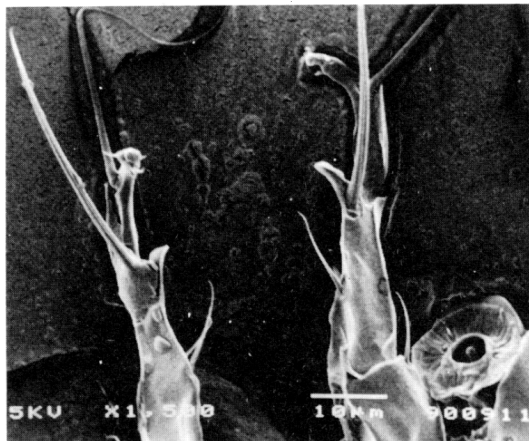


写真1 雄成虫第4脚(走査電顕)